

日蓮宗寺院の公害実態調査報告

現宗研調査部

はじめに

「第五回中央教化研究会議」が開催されるにつれて、その討議テーマの一つとして、今日われわれの重要な課題として考えられねばならない「公害」の問題を、宗教者の立場から取り上げようということが準備会で決まり、その取り上げ方について、一、一般的公害の認識について、二、教場の立場からどう考えるか、三、本宗寺院の公害の実態、ということについて、資料を作成して提出することとなり、調査部において全国の寺院、教会、結社の住職、担任、教導の方々をお願いしてアンケート法による調査を行った。

これはその調査のまとめである。(なお教研会議においては中間報告として資料提出をしている)

調査の方法は寺院名簿より無作為に五二二ヶ寺(全国寺院の一〇%)を抽出し、住職宛にアンケート(次頁)を送

り、郵送配布、郵送回収によって実施した。

回収の結果は、回収二二四ヶ寺(四三・八%) 内有効ケース二二〇(四三・〇%) 無効ケース四(〇・八%) 未回収二七八ヶ寺(五六・一%) 郵送戻り一〇ヶ寺(二・〇%) である。郵送による配布回収の場合通常回収率は三〇%どまりといるのに対して高い回収率であったということが出来る。

回収率を地区別に整理すると、

関東・京浜地区一五九通発送六六通回収(四一・五%)
山静・中部地区一一一通発送四七通回収(四二・三%)
北陸・近畿地区一〇〇通発送四四通回収(四四・〇%)
中四国九州地区 九〇通発送四六通回収(五一・一%)
東北北海道地区 五一通発送二一通回収(四一・二%)
となり、各地区とも四〇%台の回収率で極端な差が生じていないことは、以後のデータに対してもある程度の信頼をおけるものと考ええる。

調査項目については次頁にアンケートの全文を載せてあるが、調査の準備に十分な時間をとれなかった関係で、質問項目の設定が予備調査の性格があり、解答者にとまどいを生じさせる結果となったことは反省せねばならないと考えている。

日蓮宗寺院の公害実態アンケート

サンプルNo	チェッカー
--------	-------

お忙しいところ申訳ありませんが以下の質問にお答え下さい。回答項目の中で該当するものを○でかこんで下さい。該当する項目のないときは具体的に記入して下さい。

コード

一、性別 (1) 男 (2) 女

二、年令 (1) 二〇代 (2) 三〇代 (3) 四〇代
(4) 五〇代 (5) 六〇代 (6) 七〇代
以上

三、学歴 (1) 小学校卒 (2) 中学校卒 (3) 高校卒
(4) 大学卒 (5) なし (6) その他

四、兼職の有無 (1) 住職専任 (2) 住職兼任

その場合の職業は

五、居住地域 (1) 住宅地域 (2) 農村地域
(3) 工場地域 (4) その他

六、地域で社会的な活動をされていますか。

- (1) している (2) していない

七、「公害」という言葉を聞いてどのようなことを思い浮かべますか具体的に一つだけ書いて下さい。

SQ1 それは何によって得た知識ですか

- (1) 新聞、テレビなどから (2) 自分の経験
(3) 知人、檀家などの話から
(4) その他

八、公害について話し合ったことがありますか

SQ1 (1) ある (2) ない

- (1) 家族と (2) 檀信徒と
(3) その他

SQ2 その話題は何から得たものですか

- (1) 新聞、テレビ等の報道から
(2) 地域での具体的事例から

(3) その他

(2) ない

九、あなたは公害を経験したことがありますか

S Q 1

(1) ある

S Q 1 それはどのような公害ですか

(2) ない

一〇、あなたの檀信徒で公害を経験した方がありま
すか

(1) いる

S Q 2 それはどのような公害ですか

(2) いない

一一、あなたの住んでいる地域に公害はありますか

(1) ある

S Q 1 それはどのような公害ですか

(2) ない

一二、あなたは昔(一〇〜一五年位前)と現在とで
あなたの地域の環境は良くなったと思います
か

S Q

(1) 良くなった

S Q 1 どのように

(2) 悪くなった

S Q 1 どのように

(3) 変らない

一三、あなたの寺院又は近所の寺院で施設が公害の
被害をうけていますか

(1) うけている それはどのような公害ですか

(2) うけていない

一四、無過失賠償という言葉をご存知ですか

(1) 知っている

(2) 知らない

一五、公害の原因は何だと思われれますか

(1) 企業の無責任 (2) 政治の対策不足

(3) 経済体制の問題 (4) 住民の無知

(5) その他

一六、あなたの地域に公害対策の運動はありますか

(1) ある S Q 1 あなたは参加したことがありますか

(2) ない

(3) 知らない

(4) 知らない

(5) 知らない

一七、あなたは昔(一〇〜一五年前)にくらべて現
在の暮らしむきが良くなったと思いますか

(1) 良くなった

- (2) 悪くなった
- (3) 変わらない

一八、もし、あなた、あなたの家族、あなたの地域で公害が起り実際に被害が出たらどう思うと思いますか

- (1) 公害反対の運動をおこす

- (2) 別に何もしない

- (3) わからない

一九、環境破壊がこのまま進めば地域は滅亡すると思う考え方がありますがあなたはどう思いますか

- (1) 近い将来破滅する

- (2) 技術の開発で乗りこえていく

- (3) 宗教者の指導で乗りこえていく

- (4) その他

二〇、宗教者として公害にどう対処すべきと思いますか

- (1) 教団として公害をなくすための国家諫暁の活動をすべきだ

- (2) 個人で公害問題に対処していく

- (3) もうどうしようもない

- (4) その他

※ ありがとうございます。

公害問題についてこの質問の他に何か考えておられましたらご意見をお書き下さい。

解答者のフェイスシート及び属性について

(1) 解答者の性別は、解答者を寺院住職にお願いした関係で

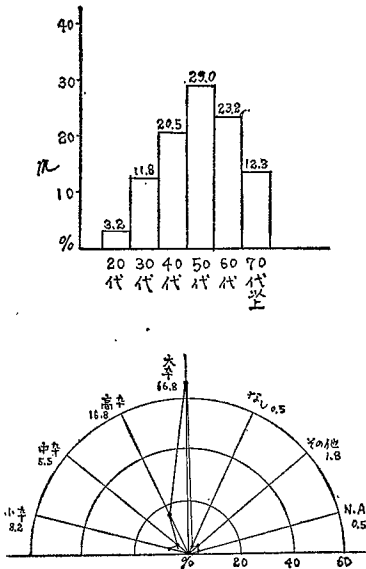
男性 二二二(九六・四%)

女性 八(三・六%)

計 二二〇(一〇〇・〇%)であった。

(2) 年令別にみると図のごとく、四〇代以下が三五・五%であるのに対して五〇代以上が六四・五%となり、一般社会に較べてかなりの老令集団であるといえる。

(3) 学歴別にみると大学卒業者が六六・八%であり図(1)知識集団である側面を示している。



(4) 住職の兼業については

住職専任	一七一	七七・七%
住職兼任	四八	二一・八%
無解答	一	〇・五%

計 二二〇 一〇〇・〇%

兼業の職種は、教員がもっとも多く五九%、次いで公務員の七・七%、施設経営七・七%、その他二五・六%となっている。

(5) 居住地域については

住宅地域	九八	四四・六%
農村地域	一〇八	四九・一%
工場地域	五	二・三%
その他及無回答	九	四・六% (無回答一)

計 二二〇 一〇〇・〇%

(6) 地域社会での活動については

行なっている	九六	四三・七%
行なっていない	一二二	五五・四%
無解答	二	〇・九%

計 二二〇 一〇〇・〇%

地域活動の内容についてみると社会教育関係(子供会、青年会等)二八・五%、社会福祉関係一〇・三%、保護司

一二・九%、民生委員七・八%、町会・PTA等六・九%、その他一七・二%となり、寺院住職が、地域社会でのボラ

ンタリー・リーダーである傾向を示しているということができる。

以上フェイスシート及び属性について簡単にみてみたが寺院住職の傾向として、かなり年令と学歴が高く、地域社会では名望家的役職に就いて活動がなされている一方、約二割の人々は兼職することによって生活していることが理解できる。

公害についての認知度

はじめに述べたごとく、この調査を実施する段階において、時間的制約から問題の焦点を絞り切れず、予備調査的性格となった、それは(7)、(9)、(11)等の設問において、公害の実態について、調査者の側で具体的公害の名称をあげず解答者に示してもらうという形をとったことである。したがって集計の段階で具体的事例が広範囲にわたったため、集計の際に整理させて頂いたことをおことわりしておかねばならない。

(7)の質問は「公害」という言葉に対してどのようなイメージをもたれているかについての設問であったが、大別して、

1、具体的解答、空気汚染、鹿島の地域開発、四日市ぜんそく、イタイイタイ病、食物汚染など具体的公害の名称をあげて答えているもの、六三 (二八・六%)

2、抽象的解答、人類滅亡、世紀末、健全な生活への不安、一般の迷惑、など抽象的に公害をとらえて答えているもの、一〇四 (四七・三%)

3、無解答 五三 (二四・一%)

という結果となり、公害への認識は、具体的なものが三割、抽象的認識が五割である。

(8) ついで公害について話し合ったことがありますか、という設問に対しては

1 話し合ったことがある 一九〇 八六・三%

2 話し合ったことがない 二一 九・五%

3 無解答 九 四・二%

公害について話し合ったことのある人は実に八六%を数え、公害がすでに一部の問題ではなく、多くの人々の問題として定着していることが理解できる。さらに、

(8) SQ 1 その話し合いの相手について聞いてみると

家族 四一 二一・六%

檀信徒 五六 二九・五%

その他 八二 四三・二% (家族、檀信徒含み)

その他知人職場等

無解答 一一 五・八%

計 二二〇 一〇〇・〇%

問題が住職と寺族の範囲を越えて、檀信徒、知人、職場という形で、少くとも話題としては多くの人々の生活の中

で考えられていることがわかる。

(8) SQ 2 その話題が何から得た知識によるものであるかという問に対しては

新聞、テレビ等 一一三 五九・五%

地域の事例から 三七 一九・五%

その他 三三 一七・四%

(地域の事例とマス・コミ含む)

無解答 七 三・八%

計 二二〇 一〇〇・〇%

一般的傾向として、マス・コミなどからの間接的情報による知識である傾向を示しながらも、地域での具体的事例がその他の項を含めて三六・九%という数字は、公害が観念的知識の段階から具体的経験知識の段階へ、つまり自分の住んでいるところの問題として語られているということが理解される。

このことは問十四からも考察される。

(14) 無過失賠償という言葉を知りか

知っている 一五二 六九・一%

知らない 六二 二八・二%

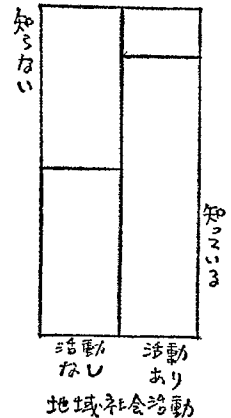
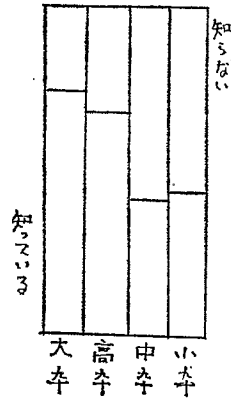
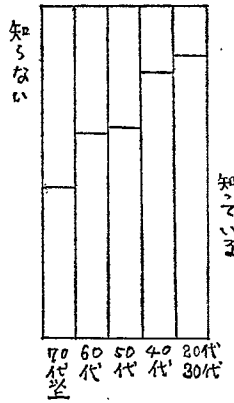
無解答 六 二・七%

計 二二〇 一〇〇・〇%

どちらかといえば、法律の専門用語として用いられている、無過失賠償という言葉に対する認知度も七割近い人々

が知っている」と答えており、公害の広がりの中で問題に対する意識の高まりを知ることができる。

この用語に対する認知度を年令別、学歴別、地域での活動別にクロスしてみると、(図2)年令別では四〇代以下の八〇%以上認知に対して五〇代以上の六〇%認知と、やや若い方に認知率は高く、学歴別では学歴の高さに比例して



認知度の高いことが分る。しかし、それ以上に重要なのは地域社会での活動の有無とのクロスで、何らかの形で地域社会で活動している人々の認知が八四・四%であるのに対し、活動をしていない人々の場合は五〇・七%となっており、より社会的に目を向けている人々の方が、公害問題に対しての関心も高いということが理解できるのである。

公害の現状及び被害経験について

つきに公害の被害経験についてみてみると

(9) あなた(住職本人)は公害を経験したことがありますか

ある	七三	三三・二%
ない	一三八	六二・七%
無解答	九	四・一%
計	二二〇	一〇〇・〇%

約三人に一人は、何らかの形で公害経験があると答えている。また、檀信徒の公害経験については

(10) あなたの檀信徒で公害を経験した方がいますか

ある	七四	三三・七%
ない	一二四	五六・三%
わからない	六	二・七%
無解答	一六	七・三%
計	二二〇	一〇〇・〇%

檀信徒の公害経験についても、住職と同程度の解答がみ

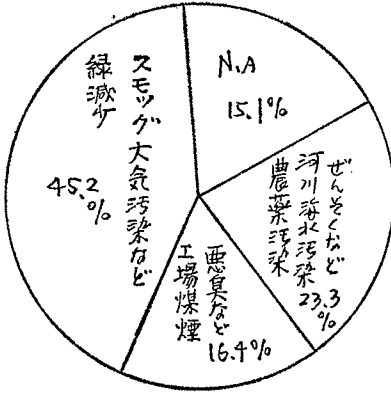
られる。また住職本人や、檀信徒が直接に公害の被害をうけないまでも、住んでいる地域に公害はあるかという間に對しては、

(11) あなたの住んでいる地域に公害はありますか

ある	九六	四三・六%
ない	一二二	五五・四%
無解答	二	一・〇%
計	二二〇	一〇〇・〇%

となり、かなりの地域で公害があると報告されている。そこでその公害はどのような種類のものであるのかにつ

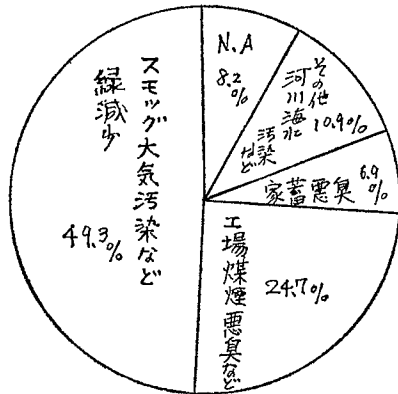
檀信徒の公害被害



いて聞いてみると、(3図)のごとく、住職・檀信徒、ともにスモッグ、大気汚染、緑の減少など約五〇%、工場から

の騒音、煤煙、悪臭など約三〇%、家畜などからの悪臭、一五%、その他農薬汚染、ぜんそく、河川、海水汚染など一五%という結果である。

寺院住職の公害被害



(12) また寺院施設の被害についての設問では、あなたの寺院、または近所の寺院で施設が公害の被害をうけていますか

うけている	三四	一五・四%
うけていない	一七六	八〇・〇%
わからない	三	一・四%
無解答	七	三・二%
計	二二〇	一〇〇・〇%

約一五%の寺院が寺院施設への被害ありと報告してきて

おり、その内容についてみると、スモッグ、大気汚染による樹木の枯損、三二・四％、工場煤煙などによる屋根、トイなど金属部分の腐蝕、八・八％、交通量増加に伴う騒音震動など二六・五％、その他八・八％となっている。

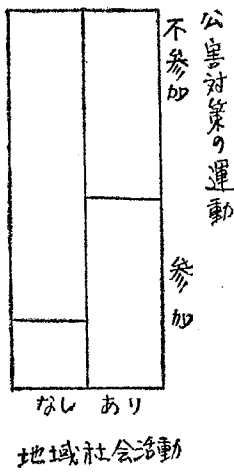
以上のような公害への認知、地域での公害の実状、公害被害という状況を背景に、地域での公害対策運動について質問を行ってみると、

- (6) あなたの地域に公害対策の運動はありますか
- | | | |
|------|-----|--------|
| ある | 五一 | 二三・一％ |
| ない | 一四四 | 六五・五％ |
| 知らない | 二二 | 一〇・〇％ |
| 無解答 | 八 | 一五・六％ |
| 計 | 二二〇 | 一〇〇・〇％ |
- (6) SQ1 あなたは参加したことがありますか
- | | | |
|-----|----|--------|
| ある | 一八 | 三五・三％ |
| ない | 二五 | 四九・〇％ |
| 無解答 | 八 | 一五・六％ |
| 計 | 五一 | 一〇〇・〇％ |

公害問題は身近な問題であるだけに、日常生活の中で利害がぶつかりあう要素を多分にもっており、むづかしい問題を含んでいるわけであるが、地域の公害対策の運動の存在を知っているもの二三％、うち参加している人々が三五％という数字は、どちらかといえば保守的とみられが、

ちな僧侶集団で、実際の現場においては地域社会における在来の活動とともに、今後公害問題という方向においても地域での活動が考えられねばならないであろう。

これまでの地域社会での活動が、社会教育、福祉活動、保護司、民生委員といった、名望家的な役割が多かったのに対し、又公害反対の運動が基本的には人間の存在にかかわる問題であるにもかかわらず、政治活動の評価を受けてきた傾向の中で、地域社会の活動とともに、公害対策の運動に参加している人々が、地域での活動をしていない人よりも多い(4図)ということは公害問題が、われわれ自身の問題であるという認識をより確実にする資料であると考えられる。



公害問題が、わが国の経済成長、生活の豊かさや表裏の関係にあることは周知のことであり、一九六〇年以降の高度経済成長の過程で表面化してきたものであるが、つぎに

この問題について表われた数字を使って考えてみたい。

(12) あなたは昔(一〇年〜一五年位前)と現在とであな

たの地域の環境は良くなったと思いますか

良くなった 六一 三一・三%

悪くなった 八九 四〇・五%

変わらない 五六 二五・四%

無解答 六 二・五%

計 二二〇 一〇〇・〇%

地域の環境については一〇年前にくらべて悪くなったと答えているものがやや上まわっている。そこでどのような良化、或いは悪化したかをみてみると、道路整備、交通便利、四三・五%、上下水道、水防などの充実、九・七%、総体的生活向上、八・一%、その他娯楽など、六・五%、無解答二八・二%となっている。

逆に悪くなったと答えたものでは、緑減少、河川海水汚染が二四・五%、交通量増加、騒音、空気汚れ、二二・五%、工場煤煙、空気汚染、一二・四%、過密過疎による不便、一五・七%、無解答二五・八%、となっている。

一方で道路が整備され交通が便利になる反面、次の段階として交通量が増加し、その排気ガスによって公害がおこるといふ自己矛盾が存在するわけである。

また生活水準の向上については、

(17) あなたは昔(一〇年〜一五年前)に比べて現在の暮

し向きが良くなったと思いますか

良くなった 一三一 五九・五%

悪くなった 三六 一六・四%

かわらない 四七 二一・三%

無解答 六 二・八%

計 二二〇 一〇〇・〇%

昔にくらべての暮らし向き(生活水準)の向上は六〇%の人々が認めているわけである。つまり個人のレベルでの生活感には向上しているにもかかわらず、社会的レベルではそのために公害という形でわれわれの生活環境を悪化させているということが出来る。この問題は単に個人的レベルや社会的レベルの問題でなく、公害防止の施策を怠ってきた企業体、及びそれを野放しにしてきた政府の無策を指摘せねばならぬのは勿論である。しかしデータを通してみる場合、明らかに個人レベルでの生活向上が、社会的レベルでの環境悪化につながっていることが理解できるわけである。

いまやわれわれの生活態度それ自身の変更が迫られているということができよう、消費者は王様であるなどというコマーシャルにおだてられ、個人生活での向上欲求を無制限につづけていくのでは、公害を断つことはできないといわざるを得ないのである。

公害に対するわれわれの態度

われわれはどのように公害に対処してゆくべきであるか
以下解答者の考え方をふまえてつづつ考えてみることにする。

(15) 公害の原因は何だと思われませんか

- | | | |
|------------------|-----|--------|
| (1) 企業の無責任 | 五一 | 二三・二% |
| (2) 政治の対策不足 | 二九 | 一三・一% |
| (3) 経済体制の問題 | 二一 | 九・五% |
| (4) 住民の無知 | 五 | 二・二% |
| (5) その他 | 一〇八 | 四九・五% |
| (1)から(4)のそれぞれに原因 | | |
| (6) 無解答 | 六 | 二・六% |
| 計 | 二二〇 | 一〇〇・〇% |

公害の原因は各種の要素が複雑にからんでいることは事実であるが、その要因をいくつかとり出してウェイト付を質問してみたのであるが、右記のごとき結果となり、その他として、(1)~(4)のそれぞれが原因であるという答が四九・五%ということで、公害に対して原因を明確に絞りきれない面のむづかしさがあらわれているということができ

る。
それでは実際に公害被害が生じた場合はどうするかという

ことで、
(16) もしあなた、あなたの家族、あなたの地域で公害が

生じ実際に被害が出たらどうすると思いませんか
公害反対の運動を起す 一六八 七六・四%
別に何もしない 六 二・七%
わからない 四一 一八・六%

無解答 五 二・三%

計 二二〇 一〇〇・〇%

実に七六%の人々が反対運動を支持しているのは頼もしい限りであるが、被害状況の程度の認識、公害源の明確度など、その上に人間関係の利害などがからみあい簡単な問題ではないと思われる、一方すでに地域での活動に参加している人々の意見として「運動を起す」などという表現はおこがましく、宗教者は、運動の中から民衆の苦悩を学ぶべきである、という手きびしい批判のあったことも記述しておくべきであろう。

(17) 環境破壊がこのまま進めば地球は滅亡するという考え方がありますがあなたはどう思いますか

近い将来破壊する 四七 二一・四%

技術の開発で乗り越える 八四 三八・一%

宗教者の指導で乗り越える 二五 一一・四%

その他 五〇 二二・七%

わからない 三 一・四%

無解答 一一 五・〇%

環境破壊の現実、すでに農薬はわれわれの身体をおか

し、海水の汚染によって魚は奇型となり、食品に含まれる添加物は、発ガン性をもっているといわれ、ガンによる死亡率は急上昇している。自然破壊による異状気象は世界的規模で広がっているといわれる状況で、近い将来破壊という答が二一％あるのはわからないでもないけれども、宗教者の指導で乗り越える一一・四％に対し、技術の開発に期待するものが、三八％に達するのは、解答者が寺院住職であるだけに不満を感じざるを得ない。

人間の無制限な欲望が、今日の事態をひきおこしているという視点に立つならば、凡悩からの解脱を説かれた釈尊の精神に素直に復帰することこそ重要ではないだろうか。物質的豊かさは、それを利用する人間の精神的豊かさによって支配され乗り越えられねばならないだろう。

将来の破滅を救うためにも宗教者の自覚と精神的豊かさへの指導がまたれているのではないかと考える。

前の項でも述べたが、その他二二・七％の中には、住民運動、地域活動によってこそ公害は乗り越えられるという指摘のあったことをつけ加えておく。

(2) 宗教者として公害にどう対処すべきと思いますか

(1) 教団として公害をなくすための国家諫暁の

活動をすべきだ 一三九 五九・五%

(2) 個人で公害に対する 一八 八・二%

(3) もうどうしようもない 七 三・二%

(4) その他(含(1)と(2)重複回答) 四四 二〇・〇%
 (5) わからない 四 一・八%
 (6) 無解答 一六 七・三%
 計 二二〇 一〇〇・〇%

宗教者として公害にどう対処すべきかという態度では、教団として国家諫暁の活動をすべきであるというものが、六〇％に達している。質問設定の段階でやや安易にこの項目を入れたことの反省をしつつ考えるならば、われわれは改めて現代における国家諫暁とは何か、いかにあるべきかを考える必要があるのではないだろうか。

まさに鎌倉社会の矛盾に対して諫暁された祖師の精神を現代社会の矛盾に対して、いかに生かすかということになってくるわけである。

それは教団人の一人一人が現代における安国論を考えるということであり、それを教団の力としていくことであろう、同時に現代の国家は国民の自覚の上に成立するものであるから、国家諫暁とは民衆への布教縁の拡充をも意味するものであると考える。

まとめ

以上、昨年夏に、教化研究会議への資料作成という目的で行なった、本宗寺院の公害調査の報告を行ってきたわけであるが、いまや公害問題がわれわれ自身の日常の問題

となつてゐることが明らかにされてきたと考へる。

この調査は全国寺院を対象とするという形で行なつたため、問題はどちらかというと平面的に扱われ、川崎、四日市というような深刻な公害被害の実態は出てこない、しかし一般にいわれるそのような公害地域の外側に広がる、われわれの身の回りにある公害の姿が理解することができたと考へる。

また公害は実態として明確に表われてくるものと、いつのまにか環境が悪化していったというように目に見えない間に進行しているものがあるわけで、公害に対する認識の姿勢も重要であるう、それは物質的な豊かさへと流されるのではなく、まさに、その物質的な豊かさの裏に公害があり物質的豊かさを個人的エゴイズムで追求するわれわれの心に公害の根のひそむことを知ることはなからうか。

キリスト教的人間観に支えられたヨーロッパの合理主義の方向が、人間の生命のみを絶対とする方向を作り出してきたのに対して、いまこそ仏教的倫理の重要さ、生命あるもの全ての尊さ、草木国土悉皆成仏の思想が評価され実践に移されねばならないと考へられるのである。

(文責・内山)

